アクション・リサーチによる学級内関係性の編み直し

～「民主的な関係」づくりへのアプローチ～

渡邉　美佳

1.　はじめに

「人間が人間として生きるために不可欠な条件は，他者とのつながりやかかわりにほかならない」と岩川直樹が指摘するように，人は関係の中でしか生きられない。しかし，友だち関係のマネージメントに四苦八苦する子どもの姿が指摘されている（土井隆義）。

こうした子どもたちが抱えた生きがたさに対して，子どもたちの関係性構築の場である教室空間において，平和的で協同・共同の関係を，生活指導や授業によりつくりだしていくことが必要になると考える。そこで，教師と研究者が共同で，批判的に関係を問い，関係を編み直す取り組みを考案していくことが重要であり，また関係を編み直すには，反省的で継続的な取り組みが必要であることから，本研究では小学校においてアクション・リサーチを採用した。実際に小学校のクラスに入り，子どもたちの関係を共同で分析し，課題を明らかにし，関係性を編み直していくことを試みた。

2.　研究方法

子どもの友だち関係とその社会的背景に関する先行研究を収集し，検討した。また，アクション・リサーチを T 市立 A 小学校 5 年 B 組で実施した。担任の C 教諭に共同研究を依頼し，１年目にプレアクション・リサーチを行い，2 年目にアクション・リサーチを実施した。週に１回，朝の会から終了まで一日入り，①参与観察②課題の明確化③アクションの実行④振り返り⑤共同で検討⑥修正したアクションの実行を行い，螺旋的に④～⑥を繰り返し，実施した。また，月に 1 回以上カンファレンスを行った。記録としては，ＩＣレコーダーによる音声データ，写真，参与観察記録を使用し，C 教諭へのインタビューで補うようにしていた。

3.　友だち関係に影響を及ぼす社会的圧力とその構造

子どもの関係性の問題は，友だち関係に表れる。1980 年代，子どもにとって友だち関係は，人間形成の土台であった。しかし，2000 年前後において，個性の捉え方が変化したことにより，友だち関係の重さに追いつめられる子どもの姿がみられるようになった。そして，「圏外化」（土井）や，「友だち階層制」（中西新太郎）などの新たな関係が生じている。「消費文化」と「競争原理」による友だち関係の変化や「貧困拡大」の問題は，教室に持ち込まれ，学級内関係性に影響を及ぼすと考えられる。新自由主義社会においては，みんな同じであることを前提に，競争し，「平等」な競争の結果，排除されることになっても，それを「自己責任」として受け入れてしまう。そうした関係が，他者をおかす「暴力的な関係」であるとみなした。例えば，軽度発達障害の子どもを，自分たちとは違うものとしたり，「できない」とレッテルを貼ったりして，排除してしまうよ

うな関係を言う。このような「暴力的な関係」を「平和的な関係」へと編み直すことが必要であると考えた。「平和的な関係」をつくりだし，維持していくには，異なる者同士の合意と参加が必要になる。つまり，現在の民主主義を問い直すことが必要になる。そこで，本研究では，「平和的な関係」を実現するための「民主的な関係」を，「多様性を尊重し，主体となることをおかされることなく，潜在能力のうえでの平等な関係」であると定義した。その「民主的な関係」を学校で子どもと追求し，つくりだすために，アクション・リサーチを行った。

4. T 市立 A 小学校 5 年 B 組でのアクション・リサーチ

一学期に参与観察を行い，子どもたちの関係に関する課題として，①グループの閉塞化，②グループ同士の圏外化，③男女の圏外化，④グループ内の権力関係，⑤グループ同士の権力関係（友だち階層制），⑥tr 男による一方的な支援，⑦孤立化・圏外化の七点が明らかになった。例えば，グループの閉塞化では，グループの中で次々に外されるという現象があった。これら七点の課題を「固定的なグループ関係」，「固定的な権力関係」，「孤立化」の三つに整理し，これらの関係から脱却するために，二学期に様々なアクションを行った。

長期にわたり実施した主要な二つのアクションとして，一つ目の「共同的学び」によるアプローチ（実践者：C 教諭）では，総合学習の時間に環境をテーマとして行った。「対等に生きる」とはどういうことか価値観を身につけるとともに，多様なグループが出会いの場をつくると考え，同時期に次の三つの違った方法でグループ活動を行った。①調べ学習のグループを調べたいテーマ別でグループを作った。②エコグッズ制作のグループをくじで強制的に作った。③エコアート制作のグループを，出入りも移動も自由にした。

二つ目の「学級内クラブ」によるアプローチ（実践者：筆者）では，筆者からクラブの提案をし，子どもたちが自主的にクラブを立ち上げ，活動していった。また，他のクラブについても知れるように，全体クラブ活動を 2 回行った。子どもたちは，学級内クラブでの活動が自分の交友関係を広め，いろいろな子どもと出会う場になり，それが自分やクラスにとって意味をもったことについて自覚的であった。二つのアクションを通して，子どもたちは多様な関係性に広がり，グループの圏外化も見られなくなり，権力関係を超えたつながりが見られるようになった。

5. アクション・リサーチの意義と課題

今回アクション・リサーチを行った結果，意義として三点挙げられる。一点目は，教師の見方が多角的になり，変化する点である。二点目は，アクション・リサーチという共同研究体制の有効性が明らかになった点である。三点目に，今回実施したアクションについては，前提条件は必要だが，実用性が高く，類似した課題が見られる状況において活用できる可能性があった点である。条件としては，一学期から班活動を行い，少人数での活動を経験してきたことである。

また，研究体制の課題として，教師と共に学校や教室を分析する一員として子どもを位置づけ，状況分析への「子どもの参画」を考えていくことが挙げられる。子ども自身が状況を変革し，関係性を編み直せる状況が必要だと考える。

（指導教員　山田綾）